

平成31年3月20日

宮内庁長官 山本 信一郎 様

一般社団法人 日本茅葺き文化協会
代表理事 安藤 邦廣

大嘗宮の茅葺き屋根に関する要望書

拝啓 時下ますますご清祥のこととお慶び申し上げます。

本協会は、茅葺きの文化と技術の継承と振興をはかり、もって日本文化と地域社会の発展に資することを目的として活動しています。

このたび貴下で準備中の天皇即位に際して執り行われる大嘗祭の大嘗宮の屋根について、諸般の事情から簡素化が求められた結果、その主要な社殿の屋根が板葺きで葺かれることになると発表されました。

この大嘗宮の屋根は延喜式に示されることに従って、古来より必ず茅葺きで葺かれて参りました。前回の平成天皇即位においても主要三殿は茅葺きで葺かれました。大嘗祭は、稲を刈って実りをいただき、その神聖な作物である稲穂を神に捧げることに関わる儀式であり、大嘗宮の屋根をイネ科の草であるススキやヨシで葺くことは、そのことと深く結びついています。伊勢神宮においても、正殿をはじめとする主要な社殿の全てが茅葺きであることも、そのことを表すものに他ならず、その式年遷宮においても茅葺きは絶えることなく繰り返され、守られています。

このように、茅葺き屋根は変わらぬ日本文化の姿を端的に表すものといえます。大嘗宮の茅葺きが次の天皇即位に際して途絶えることがあるとすれば、その文化的損失は計り知れないものがあります。

今日、日本の茅葺き屋根は、近代化や工業化の中で、社寺建築や民家においても急速にその姿を消しつつあります。その中で、文化庁は今年3月に、日本の伝統的な木造建築技術の世界遺産への登録提案を行います。この伝統建築工匠の技として登録提案がされる木工等17の職種のひとつに茅葺と茅採取も含まれています。これは、茅葺き文化の衰退に歯止めをかけ、それを後世に伝える上で大きな支えとなるものです。

世界的にみると、ヨーロッパでは、近代化の中で衰退した茅葺きが今日見直されています。それは、伝統文化の再評価のみならず、茅葺きが環境問題や資源問題の中で見直され、茅葺きは復活を果たしています。それを受けて、2011年に国際茅葺き協会（International Thatching Society-ITS）が、イギリス、オランダ、ドイツ、デンマーク、スウェーデン、南アフリカの6カ国によって設立され、日本は2013年に加盟しました。このITSの第6回国際茅葺き会議が、2019年5月に岐阜県の世界遺産集落白川郷にて、開催されます。

以上のように、茅葺きは日本の伝統文化として再評価され、世界遺産にも登録される予定であり、茅葺きの国際大会を通じて、日本の茅葺きはいま世界的に大きな注目を集めています。この時期に大嘗宮が茅葺きで葺かれることは、日本の茅葺きの歴史を遡り、茅葺きが稲作農耕と深く結びついてあることの意味をあらためて考え直すよい機会といえます。

このたび、費用がかかりすぎるという理由で、茅葺きがとりやめになるということですが、それについては、古来の葺き方である逆葺きとすることで、費用削減をはかることができます。また、茅の材料と職人の手配においても、本協会として調査を行ったところ、限られた予算と工期の中で屋根を葺き上げることは十分に可能です。大嘗宮を茅で葺くことについて、本協会としても全面的に協力する用意があります。

貴下におかれましては、大嘗宮の屋根を茅で葺くことの意義について改めてご理解いただき、大嘗宮を茅葺きとすることについて再考賜りますよう、切にお願い申し上げます。 敬具